

## 2006 年度秋学期プロジェクト科目成果報告会総評

同志社大学プロジェクト科目運営委員会

今年度の最終成果報告会は、プロジェクト科目第1期生による最終成果報告会となった。京田辺で4プロジェクト、今出川で、11プロジェクトが参加した。今出川では、午前と午後にまたがって開催されることになった。報告会は、春学期と同様に授業最終日と補講日に行われた。試験・レポートの時期と重なるタイムテーブルの設定であるにも関わらず、多くの学生の参加があったことは頼もしいことであった。

最終成果報告会に参加して思ったことを記すことで、全体の講評としたい。

最終成果報告会は、プロジェクトの優劣を競うのではなく、プロジェクトの成果が自己満足に終わらないように自己点検・評価するための機会として設定されている。そして、各プロジェクトがそれぞれの報告を聞いて、相互評価しあえるのが、あるべきプロジェクト科目の報告会の姿であると言える。その意味では、各プロジェクトの間で、質疑応答がもっと活発に行われることを期待したい。

春・秋連結のプロジェクトはすでに中間報告を経験しており、今回のプレゼンテーションも一定度の水準に保つことができていた。春・秋を通しての長期目標、各学期ごとの短期目標を明確に設定して取り組んだプロジェクトが大きな成果をあげていたように思う。秋学期科目の場合も同様であり、各月ごとの短期目標を設定したり、個人目標を設定することで、学生のモチベーションを維持していく工夫が見られた点も注目される。プロジェクトの具体的な目標設定をしっかりと行うようにしたい。

また、プロジェクトのテーマを担当者と学生の間でしっかりと議論できたプロジェクトほど、達成感のある充実した最終成果をあげることができているように思える。スタートの時に、最終ゴールのイメージをしっかりと共有できるように議論していきたいものである。

なお、グループ別のプロジェクト活動になっている場合に、グループ相互の連携がとれずに、ばらばらになってしまう事例もみられた。これは、プロジェクトの人数にも関連しており、学生のプロジェクトとしては、10人前後が適正な人数と言えよう。プロジェクトでは、メンバー間のコミュニケーションが最も重要であり、スケジュール管理や情報共有に留意したプロジェクトは、個人では達成できないチームとして大きな成果をあげることができているようである。

また、学部や学年の枠を越えたプロジェクトの可能性を生かしきることができたプロジェクトと、逆にそれがコミュニケーションを阻むものとしてプロジェクトの活性化に生かせなかったプロジェクトもあった。プロジェクトは、こうしたリスクやトラブルを内在しながら、それを克服していこうとするところから立ち上がっていくものである。そうした困難と正面から向き合いながら、自分たちのプロジェクトをメンバーとともに力を合せて遂行していくところに、プロジェクト科目の醍醐味がある。

プロジェクトに参加した学生に共通しているのは、自分たちが前向きに取り組めば目標は必ず達成できると言う自信ではないかと思う。プロジェクトを通して、各自が自分の居場所を見つけて、そこで一人ひとりが自分に応じた能力を身につけたであろうことを確信した報告会であった。次年度の活動にも大いに期待したい。